

余命宣告後に幸せに生き抜いた患者と家族・友人たちの感動ドキュメント

この本は大本ふじ子さんの余命期間をノンフィクションで紹介しています。家族は余命宣告されたことを知ってから、ひたすら思い出づくりに励み、それは信じ難いほど明るくて幸せな、濃い毎日にしてしまいました。

ふじ子さんは沖縄の離島、久米島に生まれ育ち、高校の卒業式を待たず家出のように島を飛び出しました。東京の葛飾で働きながら資格を得て幼稚園の先生になりました。そして結婚して3人の息子を育て上げました。苦勞の甲斐があつて、ようやく孫の誕生を楽しみにできるところまでたどり着きました。ところが57歳の秋に乳がんが再発して突然の余命宣告を受け、翌年の早春に亡くなりました。

そんな人生を彼女は「とんとん拍子」だったとふりかえています。幸せだったと述べているのです。それが強がりではないことはこの彼女と家族のドラマを知ればわかります。そこには残されたわずかな人生を貪欲に生ききった彼女の生き様と、家族、親戚、友人、そして在宅医療に携わる人たちの力強い支えがありました。ぜひ、ふじ子さんの残した命のメッセージをお読みください。
(企画・編集・執筆担当者 渡邊拓美)